

## 福音のヒント 年間第3主日 (2018/1/21 マルコ 1章 14-20節)

### 教会暦と聖書の流れ

今年の年間主日のミサの福音では、主にマルコ福音書を用いてイエスの活動の歩みを思い起こしていきます。イエスはヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受けたとき、聖霊に満たされ、神の「愛する子」と宣言されました(マルコ 1章 9-11節)。そして荒れ野で悪魔の誘惑を退けた(1章 12-13節)のち、きょうの箇所から神の子としての活動を始めるのです。

### 福音のヒント

(1) マタイ福音書4章12節では「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた」とあり、ヨハネの逮捕がイエスのガリラヤ行きの理由だったような印象がありますが、マルコは「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き」と言うだけです。マルコはヨハネの活動の時期とイエスの活動の時期をはっきり区別しようとしているのでしょう。準備の時は終わり、いよいよ神の救いが実現する時が来たのです。ヨハネはユダヤの荒れ野で活動していました。そこからエルサレムの都の人々に回心のメッセージを告げました。一方、イエスが活動の場として選んだのは、エルサレムの都からは遠いガリラヤと地方でした。そこはイエスの故郷であり、人々の生活の場でした。



(2) 「福音」はギリシア語で「エウアγγελリオン euangelion」で「良い知らせ」を意味します。「神の福音」はここでは「神からの良い知らせ」の意味で受け取ればよいでしょう。「時は満ち」は神の計画の中での決定的な時が来たことを表しています。「神の国」の「国」は「バシレイア basileia」です。この言葉は「王(バシレウス basileus)」から来ています。「王であること」「王となること」「王としての支配」「王が治める土地(=王国)」の意味で用いられます。「近づいた」は文法的には完了形になっていて、「近づいたがまだ来ていない」の意味ではなく、「近づいてもうここに来ている、ある意味で実現し始めている」という意味があります。

ローマ帝国がユダヤ人を支配し、貧しい人が苦しんでいても、神は遠くにいて沈黙していると感じていた当時の人々に対して、イエスは「神が王となられる」と語りました。神は遠くから人間を眺めているような方ではない。神は近づいてきて、今まさに救いのわざを行おうとしておられる。それはまさに救いのメッセージ＝「福音」でした。

(3) これに対して人間に求められることは「悔い改めて、福音を信じ」ることです。

「悔い改め」はギリシア語で「メタノエオーmetanoeo」で、もとの意味は「心を変える」ですが、単に道徳的な反省を意味する以上に、聖書の中では全身全霊で「主に立ち帰る」ことを表す言葉です。「福音を信じなさい」の「福音」の内容は「神の国の到来」そのものを指しています。「信じる」はただ「本当だと思う」だけでなく、そこに「信頼を置いて自分をゆだねる」ことを意味しています。

15節の言葉は、マルコがイエスのメッセージをまとめたものです。マルコ福音書は、他の福音書よりもイエスの説教を少ししか伝えていませんが、イエスが「教えた」と言うとき、いつもこのメッセージが語られているのだと考えればよいでしょう。

(4) マルコはイエスの活動の最初のこととして、4人の漁師を弟子にする話を伝えています。漁師は特に貧しく、身分の低い人ではありませんでした。使徒言行録4章13節でペトロとヨハネは「無学な普通の人である」と言われています。特別な教養(律法についての知識)があるわけでもない普通の人をイエスは弟子にします。

ところで考えてみると、いきなり見知らぬ人に声を掛けられてついていくというのは不自然ではないでしょうか。ルカはそう考えたらしく、まず、イエスの言葉を聞き、イエスのなさったこと(不思議な大漁の出来事)を見てから、ペトロたちがイエスに従ったという話を伝えています(ルカ5章1-11節)。マルコはこの話を実際に起こった話というよりも、「イエスに従うとはこういうことなのだ」ということを示す典型的な物語として伝えている、と考えたほうがよいかもしれません。

普通に考えれば、弟子のほうが師事したい先生を見つけて、弟子入りを願うのではないのでしょうか。それなのにここではイエスのほうが弟子を選ぶことになっていることも特徴的です。わたしたちはどうでしょうか。わたしたちのほうがイエスの素晴らしさを知って、イエスに従っていこうと思ったという面もあるでしょう。しかし同時に、それよりも前にイエスのほうが自分を呼んでくれていたと感じることもあるのではないのでしょうか。

「神の選び」は、その人が優れているからその人を選ぶというわけではありません。選びの根拠は人間にではなく、神にみ心あります。神はすべての人を救うために、もっとも弱く貧しい人々を選ばれるのです(申命記7章6-8節、Iコリント1章26-31節参照)。

(5) 最初の弟子になったこの4人は、15節のイエスの神の国への招きに最初に応えた人だとも言えるでしょう。イエスのメッセージは自分と関係ないところで、自分に関係なく、神の国が実現していくというメッセージではありませんでした。それは一人一人に「悔い改めて、福音を信じる」ことを求めるメッセージなのです。自分のすべてを神に向け直し、この神の国の到来のメッセージに信頼を置き、そこに自分をゆだねていく、その時、神の国はある意味でもう始まっていると言ってもよいでしょう。おそらくわたしたちにとっても事情は同じです。自分の周囲の世界を見渡しても(いくらテレビを見ていても)、神の国の始まりは見えてこないでしょう。しかし、自分がイエスのメッセージに応じて生きようとしたときに、自分の周りで何かが変わり始めるのです。